齋藤雅子（平成２８年度アジアフェロー）

２０１７年５月６日付

インドネシア活動記録（最終報告書）

タイトル：　インドネシア簿記・会計教育の持続的発展に向けた教材開発

1.　活動概要

本プログラム活動は、日本人研究者が国を超えた共同研究を通じて学術面からインドネシア研究者との知的・人的交流をより促進し、経済活動を支える「簿記・会計教育」の向上を目指して将来の担い手となる人材育成のあり方を提唱する、という学術的意義の高い新たな挑戦である。その目的は、インドネシアの持続的な経済成長を支える人材育成の柱として日本の高度な簿記・会計技術を活用して両国の高等教育に携わる教員が協働でインドネシアの大学生向け簿記教材開発を行うことにある。本活動では、インドネシアの大学生が有する簿記・会計スキルの現状を把握するにあたり、パイロット・テストを実施する計画であり、そのような機会は本プログラム活動でなければ行えない日本人教員とインドネシア大学生との交流を実現できる場ともなる。

そもそも本活動の背景には、インドネシアの高学歴化が進んでいる現状と相反して、経済発展を支える産業人材の不足がある。アジア域内の経済活動活性化に向けた動きが加速している中で、高い経済成長を続けるインドネシアの世界におけるプレゼンスは非常に大きいものがあるが、その一方で、大学生の簿記・会計スキルが ASEAN 域内でも比較的低いと言われている。またそのようなインドネシア会計人材の不足が日本企業のインドネシア進出を阻害する一つの大きな要因となっていることが、本フェロー（齋藤）がこれまで遂行してきた研究活動において明らかとなっている。

写真１　トリサクティ大学経済学部教員と学生

写真２　プレゼンテーション（ワークショップ）

2.　活動記録

上記で述べた問題意識や活動目的から、２０１７年２月３日～３月１５日までの期間（４１日間）において、本アジア・フェローがインドネシアへ赴き、首都ジャカルタのトリサクティ大学（私立）を活動拠点として遂行した主な活動内容を要約すると、次の３点で述べられる。

- インドネシア現地教員らと交流し、簿記・会計教育に対する現状の問題意識を共有する。
- インドネシア大学生の簿記・会計スキルを測定するパイロット・テストを実施する。
- 測定結果を分析し、授業で活用可能な教材開発を進める。

2.1.　インドネシア現地教員らとの知的・人的交流

複数の先行研究などからインドネシア大学生の簿記・会計スキルが ASEAN 域内でも比較的低いと言われているが、実際現場で大学生の教育を担う教員らが果たしてそのような問題意識を持っているのか、また持っているとした場合どのような改善策が必要だと考えているのかについて、問題意識の共有をはかるべく、教員らから直接話を聞く機会が必要だと考えた。

そこで、複数の大学を訪問し、教員らと交流・議論をするための環境づくりとして、本フェローである齋藤と現地コラボレーターのマヤングサリ氏（本プログラム遂行において本フェローを受入れ、協働活動を担うトリサクティ大学経済学部教員、会計学研究者）をそれぞれの大学側が受入れやすい状況を提供する必要があった。特に、インドネシア大学生の簿記・会計スキルを測定するためには、ある一定時間の授業時間を提供いただく必要があるため、各大学で活動意義について理解いただくことが前提となる。同大学にて開催されるワークショップにゲストスピーカーとして参加・講演を行い、その後教員らが集まる時間を活用し、相互で簿記・会計教育のカリキュラムや教材などに関する意見交換を行った。なお、ゲストスピーカーとして参加したワークショップは、次の(1)(2)のとおりである。

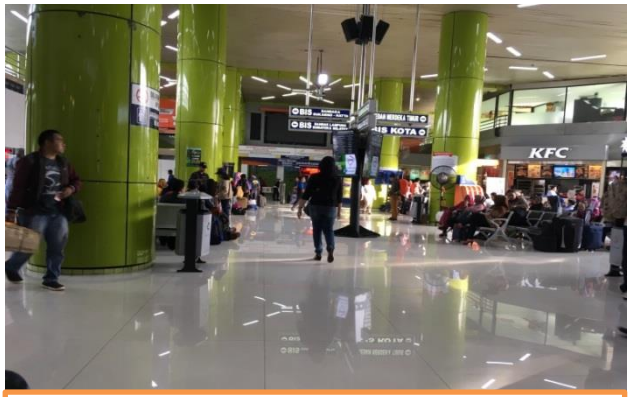


写真３　Gambir 駅（ジャカルタ）

写真４　Purwokerto 駅ホーム

写真５　プルケルトへ出発
（コラボレーターらと）

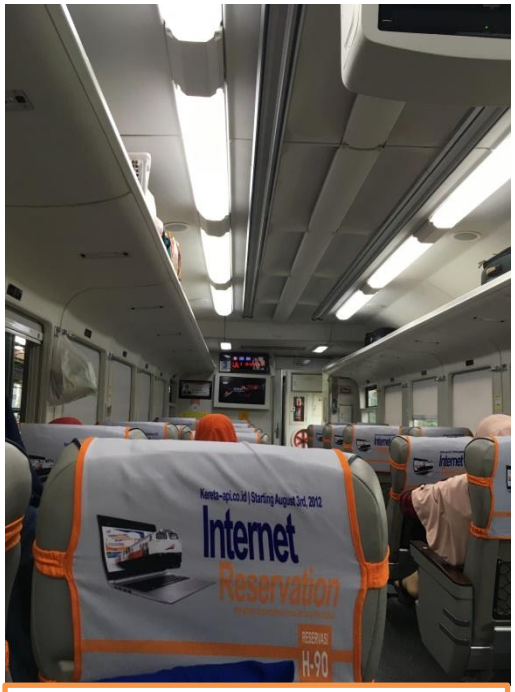


写真６　列車内の様子
（プルケルトまで５時間余･･･）

(1) ヘンドラル・スディルマン大学　@プルケルト（中央ジャワ）

開催日：2017 年 2 月 8 日（水）

「会計専攻の新カリキュラム開発に関するワークショップ」

概要：　国際会計人材を育成するためのカリキュラム開発をいかに充実させていくかが同大学の課題であり、本ワークショップを通じて日本、インドネシアの会計教員がカリキュラム改善に向けた情報交換をする場となった。近年新たに導入された会計専門職資格「勅許会計士（ＣＡ）」の合格率向上を目指した場合、インドネシア会計士協会（ＩＡＩ）の求める受験資格要件を充たすための必修科目数の増加が見込まれるが、すでに会計カリキュラムの中で大半が会計科目であり、他のビジネス科目との関連性で会計の重要性を学生に教育する場が十分でない現状があることが意見交換で明らかとなった。

写真７　講演前の様子

本フェローはインドネシアと異なる会計カリキュラム体系を有する日本の一般的な大学において、会計科目数や他のビジネス科目との関連、授業用教材について説明した。インドネシア教員が強い関心を示したのは、日本の大学では履修科目の大半が選択科目であるという点である。インドネシアの大学において会計学士の卒業要件を充たすためには、授業科目のほとんどが必修科目であり、学生が選択できるのはわずか数科目に過ぎないからである。

また会計教材については、日本では多くの授業教材が日本オリジナルで製作されているが、インドネシアでは欧米のテキストをインドネシア語（バハサ）に翻訳した書物、原著オリジナル（英語版）を利用しており、インドネシア学生に理解しやすい授業用教材の開発が今後の検討課題であるとの認識で一致した。

写真８　プレゼンテーション中

写真９　ワークショップ看板

写真１０　ヘンドラル・スディルマン大学教員らと

(2) パムラン大学（UNPAM）＠タンゲラン（バンテン）

開催日：2017 年 2 月 11 日（土）

「会計教育と国際研究に関するワークショップ」

写真１１　学生による伝統的ダンス披露

写真１２　講演開始

概要：　本ワークショップは、国際学会、国際ジャーナルにおける研究成果公表への成功へのプロセスをテーマに開催された。その冒頭では、同大学学生による伝統的ダンスが披露され、学長や本フェローの齋藤を含む教員らもダンスに加わるなど教員・学生らとの国際交流から始まった。

本フェローとコラボレーターのマヤングサリ氏の２名がゲストスピーカーとして講演し、これまで協働で査読付きの国際学会や国際ジャーナルでの論文発表を成功させた経験やポイントを紹介した。また本訪問時に大学生の簿記・会計能力を測定するためのパイロット・テストを複数の授業において実施することに対して協力を要請、快諾をいただいた。

インドネシア政府から出された直近の通達により、大学に所属する全教員は国際化へ対応するため、年に１度の国際学会発表または国際ジャーナルでの論文刊行が求められることになった。目標を達成できない教員に対しては国からの助成金を打ち切るとされており、インドネシアでは大学ごとに会計研究の国際化を進める特色ある取り組みが喫緊の課題として求められていることを実感した。

写真１３　講演終了

写真１４　ワークショップを終えて

2.2　インドネシア大学生向け簿記・会計スキルパイロット・テスト（２月１３日～３月１０日）

本フェローの活動拠点（受入機関）となったトリサクティ大学において、パイロット・テスト実施に向けた質問項目の選定、調整並びに同大学におけるテスト実施を踏まえ、他の複数の大学に対してテスト実施に協力を正式に依頼した。パイロット・テストの質問項目は草案の段階でインドネシア会計技術

者認定機関の現地統括官からいただいたご意見を反映した形で２種類（１年次向けの基礎編、３年次向けの応用編）のテスト問題を作成し、各大学へ向けテスト実施の協力を依頼した。

最終的に、協力を受入れた大学は計７大学（※１大学継続中含む）、各授業にてパイロット・テスト参加を承諾した大学生数は計３６４名にのぼった。また同統括官からいただいたご意見の中で「高校３年生のスキル測定ができれば大学生のスキル向上が把握できるのではないか」との示唆があり、参考情報としてパイロット・テスト受入協力をジャカルタの高校に複数依頼した。そのうち南ジャカルタの私立ゴンザガ高校１校から協力を得ることができたが、同高校３年生９４名のサンプルは、大学生の結果分析並びに教材開発を進める上での参考情報とさせていただいた。なお、本パイロット・テストに協力していただいた大学、学生数等の情報は、図表１のとおりである。

図表１　パイロット・テストを実施した大学・高校

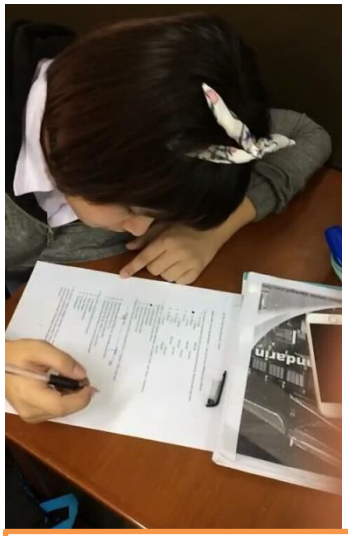
大学・高校名	地域・都市	解答学生数（サンプル数）	学年	テスト言語
トリサクティ大学	ジャカルタ	２７	１年次	バハサ版
		３１	３年次	英語版
		３１	３年次	バハサ版
メルキュブアナ大学	ジャカルタ	３０	３年次	バハサ版
イスラム大学	バンテン	４９	３年次	バハサ版
パムラン大学	バンテン	３５	１年次	バハサ版
		２４	３年次	バハサ版
バンドンイスラム大学	バンドン	３０	１年次	バハサ版
		４４	３年次	バハサ版
ディポネゴロ大学	スマラン	３３	１年次	バハサ版
		３０	３年次	バハサ版
	学生数	合計３６４		
	（内訳）	計１２５	１年次	バハサ版
		計２０８	３年次	バハサ版
		計　３１	３年次	英語版
参考：私立ゴンザガ高校	南ジャカルタ	９４	高校３年次	バハサ版

※ヘンドラル・スディルマン大学（プルケルト）については、４月末日現在パイロット・テストを進行中であり、全クラス完了次第同大学教員を通じてオブザーバーへ答案一式が届く予定である。

写真１５　パイロット・テスト中（３年次）

写真１６　パイロット・テスト前（１年次）

写真１７　パムラン大学の教員、学生さんと記念写真



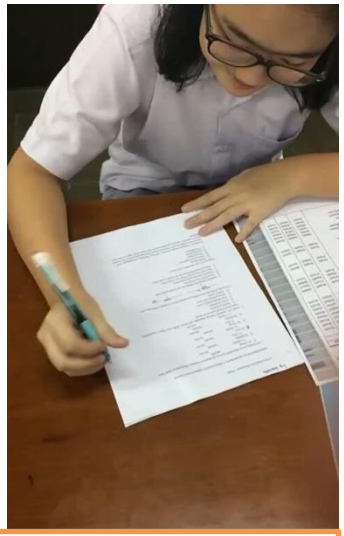


写真１８　高校生向けパイロット・テスト

2.3　測定結果分析、教材開発（３月５日～３月１４日）

図表１で示したインドネシアの複数の大学により協力を得られた大学生向けパイロット・テスト実施後、回収された１年次・３年次のテスト答案を活動拠点のトリサクティ大学等で順次採点を行い、傾向を分析する作業に着手した。まず３月末日時点の集計結果を分析するのに用いる基準について、各質問に対する正答率の高さ、低さを判断する際、回答者すべてが正答した場合を１００パーセントとし、正答率が７５パーセント以上を「正答率が高い」とし、３０パーセント以下を「正答率が低い」と述べる。

１年次（基礎編）の学生から得られた答案計１２５のサンプルを採点し、結果を分析したところ、大学間に差異は見られなかった。回答数全体に共通している部分として、基本的な仕訳問題（掛売上含む）は正答率が高いものの、決算整理仕訳や資産の区分、売上原価の算定に関する問題への正答率が低いという結果が得られた。

次に、３年次（応用編）の学生から得られた計２３９（バハサ版、英語版の総数）のサンプルを採点した。その結果、貸借対照表項目やその変動に関する問題、試算表への理解についての問題は正答率が高い反面、減価償却の手続や会計原則、財務報告の目的に関する問題への正答率が低かった。

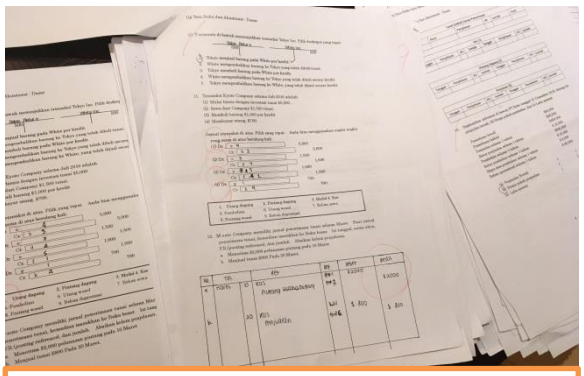


写真１９　採点後の答案

そこで、学生の簿記・会計に関する学びを深める必要がある簿記・会計に関する項目について授業用テキストを補完する副教材（授業用ハンドアウト）を作成する方向で検討を進めることになった。検討内容については、3.(2)で述べる。本結果において得られた興味深いインプリケーションは、１年次、３年次の双方において、全質問項目に対する正答数が半数に達しなかった点である。これは、インドネシア会計士協会公表のデータ(2014)で示されているインドネシアの勅許会計士（ＣＡ）合格者数が、他の ASEAN 諸国出身者に比べて相対的に低いというデータや、本フェローが複数の先行研究や文献を通じて得た認識とほぼ一致している。このような結果について、パイロット・テスト実施・分析において全面的に協力くださった現地教員も含め認識を深めた他、インドネシア大学生における簿記・会計スキル向上を目指す教育への取り組みがいかに重要であるかを改めて相互に共有できた。

3.　活動拠点における取り組み

3.1　活動拠点の妥当性

コラボレーターとして本フェローシッププログラムに対して全面的な協力をいただいたセカール･マヤングサリ博士は、現在トリサクティ大学経済・ビジネス学部会計学科長を務めている研究者であり教育者である。同氏はインドネシア会計教育学会副会長をはじめ、大学認証評価機関評価者など学会や政府関係の要職にある。またすでに本フェローと国際共同研究を遂行し、学術書や論文の国際ジャーナル発刊といった国際的な学術成果をあげている共同研究者でもある。

同氏の所属するトリサクティ大学は、インドネシアの首都ジャカルタに位置する私立総合大学である。経済・ビジネス学部に設置される会計学科には、学年あたり５００～７００名の学生数が在籍し、当該学部学生数の４０パーセントに相当する最大規模の学科である。卒業要件単位数は１４０単位であり、１科目２～３単位の科目数を学年あたり４８単位まで履修可能である。会計学科学生の８０～９０パーセントが会計学士として就職するという。

本プログラム活動を協働で円滑にかつ効率的に遂行するにあたり、コラボレーターは複数の大学教員らとコミュニケーションをとることが可能であり、また他大学教員に対して協力を要請する必要があることなどを総合的に斟酌した結果、学術面、人的ネットワーク面、立地面のいずれにおいても同氏の所属機関を受入活動拠点とすることが妥当であると判断した。

写真２０　コラボレーター所属先
（上）　トリサクティ大学校舎
（下）　経済・ビジネス学部会計学科
会計専門職プログラムオフィス

3.2　トリサクティ大学での活動・協働内容

受入活動拠点となったトリサクティ大学では、マヤングサリ氏らとともに主に３つの活動を行った。第一に、インドネシア会計技術者試験（Accountant Technician）の試験制度に関する論点整理である。第二に、大学生の簿記・会計スキル測定に向けたパイロット・テスト準備、分析と結果を踏まえた授業用教材の検討である。第三に、日本、インドネシア両国学生の国際交流に関する情報交換である。各活動の概要は以下(1)～(3)に示すとおりである。

(1) インドネシア会計技術者試験（Accountant Technician）の試験制度に関する論点整理

インドネシアでは、会計実務者を養成するべく、インドネシア会計技術者試験が全国で実施されている。当該試験は５つのレベル（Junior, Pratama, Young, Madya, Expert）に区分され、各レベルの試験を受験し、合格した者は合格証を取得できるしくみとなっている。大学３年次以上の学生もしくは同等レベル（ディプロマⅢ）以上を受験資格要件とするのが Madya レベルであり、大卒者もしくは同等レベルを受験資格要件とする Expert レベルが最上位とされ、合格は非常に難関となっている。

トリサクティ大学におけるヒヤリングによれば、会計を専攻する学生らは同試験の Madya レベル合格を目指し、その大半が合格する。しかし他方で Expert レベルに合格するのはごくわずかであるため、一応の目安として採用側の企業が学生を評価する際、Expert レベル合格者はきわめて高い評価をされているようである。

トリサクティ大学における同試験への情報入手によって、当初検討していた同試験合格者数や平均点、問題ごとの正答率を一つの参考情報とせず、協働してインドネシア大学生の簿記・会計スキルの現状を把握するため、パイロット・テストの質問項目を検討していくこととした。なお、合格率や平均点、過去問題の公表もされていない現状から、日本側、インドネシア側の研究者は同試験のさらなる改善につなげる情報公開のしくみを主催者(Institution of Accountant Technician Certification)に求めていく必要を認識した。以下は、インドネシア会計技術者試験が想定する「Madya レベルの会計実務者」に必要な会計能力を示している。

参考：インドネシア会計技術者試験「Madya レベル会計実務者」に求められる会計能力

a. 仕訳
b. 元帳
c. 財務諸表の作成
d. 精算表の活用
e. 会計ソフトウェアの活用
f. 小口現金のプロセス
g. 銀行における現金のプロセス
h. 売掛金勘定の管理
i. 負債勘定の管理
j. 商品勘定の管理
k. 固定資産の管理
l. 製造原価の算定
m. 税務申告書の作成
n. コンピュータによる減損の手続き
o. データベースの活用

出所：インドネシア会計技術者認定機関(Institution of Accountant Technician Certification)、マヤングサリ氏らによる聞き取り（トリサクティ大学）

(2) 大学生の簿記・会計スキル測定向けパイロット・テスト、授業用教材案の検討

①　パイロット・テストの準備、実施及び分析

現在インドネシアの大学生が有する簿記・会計スキルを測定するためのパイロット・テストを実施すべく、マヤングサリ氏や会計学科教員らとともに質問項目の洗い出し並びに調整を行った。さらに同氏からインドネシア会計技術者認定機関の現地統括官へ連絡をとってもらい、テスト案を確認いただいた。

得られた意見を反映して質問項目の修正・調整をはかり、最終的に次の２種類のテストをまずトリサクティ大学にて実施することになった。

基礎テスト：入学初年次である１年生向けパイロット・テスト

・インドネシア語（バハサ）版もしくは英語版の全 13 問（選択式解答全 11 問、記述式解答全 2 問の計 13 問、30 分）とした。

・簿記の基礎的な質問項目（仕訳、勘定記入、売上取引、利息計算、減価償却、売上・売上原価・売上総利益の算定など）とする。

・可能であれば、高校３年生向けにインドネシア語（バハサ）版を実施する。

応用テスト：大学３年次向けパイロット・テスト

・インドネシア語（バハサ）版もしくは英語版の全 20 問（選択式解答のみ、30 分）とした。

・英語版テストはインターナショナルクラスもしくはエクセレントクラスに限る。

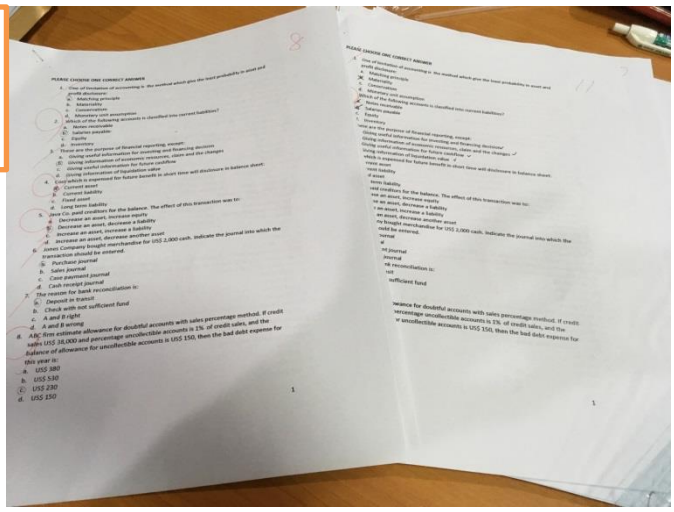
・簿記・会計の基礎的な内容から発展的な内容に関する質問まで幅広い範囲の質問項目（会計原則、資産・負債・純資産の区分、財務報告の目的、転記、試算表、売上原価、減損、帳簿の締切り、貸倒れ、減価償却、のれんなど）とする。

トリサクティ大学では、2017 年 2 月 28 日、3 月 1 日及び 3 月 7 日の 3 日間にわたり、学年別パイロット・テストを実施した。回収した答案を採点した結果（サンプル）から判明した内容は、複数の大学にて同様のパイロット・テストを実施していることから、全てのサンプルを合わせた結果として、2.3. において述べている。図表２はトリサクティ大学でのサンプル数内訳を示す。

図表２　トリサクティ大学におけるパイロット・テスト解答学生数（クラス、テスト種別）

実施月日	クラス種別	学生数 （サンプル数）	テスト種別（学年）、言語
2017 年 2 月 28 日	エクセレントクラス	２３名	３年次　英語版
3 月 1 日	インターナショナルクラス レギュラークラス	８名 ３１名	３年次　英語版 ３年次　バハサ版
	３年次	計　６２名	
3 月 7 日	レギュラークラス	２７名	１年次　バハサ版
	１年次	計　２７名	
	トリサクティ大学	合計　８９名	

写真２１　テスト実施後すぐ採点



②　簿記・会計スキル向上に資する授業用教材案の検討

複数の大学にて実施したパイロット・テストの分析結果から、得られた知見を生かし、学生の簿記・会計に関する学びを深める目的で、授業用テキストを補完する副教材（授業用ハンドアウト）を作成する方向で検討を進めることになった。これは、各大学の異なる教員が授業で活用しやすいような授業用マテリアルがのぞましいとのコラボレーターを含む現地教員からの意見を取り入れたものであり、特に、パイロット・テストの結果において正答率が芳しくなかった４項目（資産の区分、減価償却、帳簿の締切り、売上原価の算定）を取り扱う４種類の副教材を検討し、来期までに試案を協働で作成することとした。

写真２２　教員用教材

(3) 日本、インドネシア両国学生の国際交流に関する情報交換

トリサクティ大学では、来年度予定として日本語コースを設置する計画があると聞いていたことから、同大学学生の短期来日留学もしくは日本の大学生との交流を視野に入れた活動の可能性について、マヤングサリ氏をはじめ、インターナショナルクラスを担当する教員ら複数と情報交換を行った。やりとりの中で、教員からここ数年特にインターナショナルクラスに在籍する学生の学習意欲低下が深刻な問題となっており、グローバル社会で通用する高度会計人材を育成することの難しさを認識するとともに、大学在学中に海外で学びを体験する制度充実や魅力ある学習環境の提供に取り組んでいることが報告された。

写真２３　授業風景

近年インドネシア国内において日本語を学ぼうとする若者が急増し、大学外の専門学校に通い日本語を学ぶ学生も増えていることから、同大学では日本語コースを来年度設置する方向で準備を進めている。留学希望先として日本を希望する学生が多い一方、「日本語」の習得がインドネシア学生にとって相当高いハードルとなっているため、この日本語コース設置が実現すれば、日本語能力試験２級（Ｎ２）もしくは３級（Ｎ３）を取得した上でインドネシア学生が日本へ留学しやすくなることが想定される。そうすれば、受入側の日本の大学が同学生を受け入れる上で障壁となっている日常的なコミュニケーション能力を備えたインドネシア学生が来日するため、学習面、生活面での受入環境が整うと考えられる。今後の同大学における日本語コース設置並びに関連情報のやりとりを継続していくことで一致した。

写真２４　トリサクティ大学学生さんと

3.3　インドネシア特有の経験や事情（交通網、キャンパス、生活環境）

活動拠点となったトリサクティ大学のあるジャカルタ中心部は近代化が進んでいるが、特に、金融・ビジネス特区として近年注目されているＳＣＢＤ地区（Sudirman Central Business District）はインドネシア発展のシンボル的存在と位置づけられている。インドネシア証券取引所をはじめ、大手有名企業や外国資本が入るオフィスビルや高級ホテルなどが立ち並び、それらが一体となった複合商業施設を備えているため、ジャカルタの中でも防犯・セキュリティ面でも比較的安全な地域と言われている。

写真２５　ＳＣＢＤ地区の高層ビル

現地での移動は、中心部のメイン道路に沿って運行される公共バスや近郊の都市を結ぶ鉄道があるものの、駅やバス停からの交通手段はなく、徒歩で移動できるほど防犯面で安全とは言えないことから、移動にはもっぱら自動車を用いた。またジャカルタでは近年若者の失業率が高まっており、外国人への犯罪が増加しているとの情報を得ていたため、現地ではフェローの単独行動は避け、オブザーバーやその家族の所有する車で送迎していただいたり、時にタクシー（ブルーバードかシルバーバードのみ）を利用したり、夜間や人混みの多い場所へは出かけないなど行動には注意を払った。

写真２５　（上）高速道路のゲート
（下）wifi 機器ポスター

移動する車内から見た風景であるが、ジャカルタはビルの高層化が進み、高速道路も整備されている。ただ富裕層の多くが生活する一部の地域を除き、まだまだ古い施設や住宅、信号のない道路などがかなり残っている。生活インフラに欠かせない下水道や電気・ガスの整備、また交通網（電車、バス、道路）の整備が近代化に追いついていない。一方で、ジャカルタ近郊において利用できる非常に便利な wifi 用ネットワーク機器が流通し、かなりの精度で外出中でもメールやインターネットの利用がスムーズに行えた。

今回活動で訪れた２～３月は雨季にあたり、年間降雨量のうち記録的な豪雨が例年このシーズンに発生する。連日どんよりした空模様であり、突然雷を伴った激しい雨が降る。その一つの証しとして経験したことであるが、ある日ジャカルタをゲリラ豪雨が襲い、降雨量が一定時間に記録的であったことから、ジャカルタ中心部に洪水が発生、至るところで交通網が遮断された。高速道路や幹線道路が水に浸かり、道路には長時間動けなくなった車が溢れ、活動拠点であったトリサクティ大学等のキャンパスも洪水で休校となるなど、教育現場にも混乱をきたした。

２～３月の訪問は、インドネシア研究者らとの学術面での活動を比較的行いやすく、新学期がスタートしたタイミングであり、時間の効率的活用においては有効であった。ただし、その一方で、同国特有の事情である天候（雨季）、交通事情（激しい道路渋滞）、文化・宗教（食生活等）といった面で、活動計画を当日や直前になって変更せざるを得ないことが度々あったのも事実である。もう１点気になったのは、近代化の影響からか、人々の服装や暮らしが西洋化し「インドネシアの伝統的衣装」を身につけていないことである。またとりわけ若者に至っては、多様な民族がそれぞれ持つ伝統的な原語や習慣を忘れてしまっている、と現地教員たちは口々に話していた。

写真２６　洪水の様子
（左）浸水したトリサクティ大学キャンパス
（右）麻痺した道路

逆に、ジャカルタ特有のビジネスとしてここ数年市民の暮らしに根付いているという「GOJEK」と呼ばれるバイク便の請負業者（緑のジャケットが目印）がパイロット・テストの答案一式を即日最短のスピードで届けてくれた。このように、現地の人々は「トラブルは当たり前、いかに対応するか」を日々考えて生活しており、時間や計画どおりに物事を進めることに慣れている日本とのちがいを感じた。ジャカルタの滞在期間を通じて、近代化で富を得る一部の人々とそれに取り残された所得の低い人々との貧富の格差が広がっている現実をフェロー自身が直接肌で感じる機会でもあった。

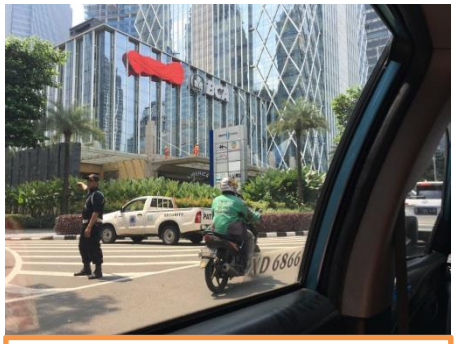


写真２７　人を運ぶ GOJEK の様子

3. フェローシップ活動を終えて

本プログラムは、日本人研究者の私がインドネシアの大学教員と共同で力を合わせる協働作業であり、極めて重要な研究課題と言える。その活動には、わが国において伝統的に発展してきた高度な簿記教育技術をどのように移転し、同国の産業人材育成をはかり、インドネシアの健全な経済発展につなげていくのかという学術面での国際貢献が前提にあり、日本企業の海外進出を促進し、日本経済の持続的発展にも寄与していく潜在可能性を秘めている。なぜなら、インドネシアが持続的な経済発展を遂げ、かつ、巨大な消費市場を有する日本との経済面でのパートナー関係を構築していくためには、まず ASEAN 域内で通用する簿記・会計スキルを習得した人材育成を目指すことが不可欠だからである。

そこで、インドネシアにおけるフィールド調査やヒヤリングを通じて得られた一つの解、すなわち大学における簿記・会計スキル教育の重要性を日本人研究者とインドネシア研究者が相互に共有し、国を支え、ビジネスを担う未来の若者を育成する観点から「インドネシア版簿記・会計教育教材の充実」をはかることとした。

本年４月末日現在、パイロット・テスト実施により得られた知見から、授業テキストを補完する役割としての副教材案（プリント）を４種類に分けて作成し、各大学の授業にて活用、その効果を協力して観察していくことで、日本、インドネシアの研究者双方は同意している。なお、今回の集計に間に合わなかったが、別地域の大学からパイロット・テスト受け入れ協力が複数あり、オブザーバーを通じて本学期中に実施を予定しているとの報告があった。サンプル回収については帰国後の現在も継続中であり、オブザーバーを経由して郵送でやりとりするなど、データ入力や分析を現地と協力しながら進めている。

国際交流基金アジアセンターよりご支援いただき遂行した本プログラムの活動を通じて、高等教育を担う日本、インドネシア両国の研究者が学術面での知的・人的交流を行う非常に意義深い機会を得た。また日本人の一大学教員としてインドネシア大学生との交流を実現することができた。このような貴重な機会を与えていただいた国際交流基金アジアセンターの皆様、現地にて活動を見守ってくださったジャカルタ支部の皆様に心よりお礼申し上げたい。また現地にてパイロット・テストにご協力をいただいたインドネシア教育機関（大学、高等学校）の教員並びに学生の皆様に対し、この場をお借りして謝意を表する。

本プログラム活動は、本年４月以降科学研究費補助金の海外調査研究を目的とする採択課題として引き継がれる。すでにインドネシアのジャワ島にて遂行した学術面での知的・人的交流を礎に、今後の調査活動は島嶼国家であるインドネシア全土に広げ、インドネシア大学生の簿記・会計スキル測定を展開していく予定である。そして、本フェローが本活動の最終的な目標として描いているのは、日本、インドネシアの教育者であり学術を担う研究者がともに育む「インドネシア版オリジナル授業用教材の開発」であり、その成果が日本経済の将来を担う日本の大学生に対する簿記・会計教育の質的向上へとつながっていくという、真の意味での国を越えた学術貢献を果たしていきたい。

参考情報

トリサクティ大学経済・ビジネス学部（Fakultas Ekonomi dan Bisnis, Universitas Trisakti）

Kampus A
Jalan Kyai Tapa No. 1 Grogol
Jakarta, 11440 INDONESIA
http://trisakti.ac.id/

ヘンドラル・スディルマン大学経済・ビジネス学部(Fakultas Ekonomi dan Bisnis, Universitas Jenderal Soedirman)
Jl. Prof. Dr. H.R. Boenyamin No.708
Grendeng Purwokerto,
Central Java, 53122 INDONESIA
http://unsoed.ac.id/

パムラン大学経済学部 (Fakultas Ekonomi, Universitas Pamulang)
Jalan Surya Kencana No. 1,
Pamulang, Kota Tangerang Selatan,
Banten 15417 INDONESIA
http://www.unpam.ac.id/

イスラム大学 (Universitas Islam Negeri)
Alamat Kampus 1:
Jl. Ir. H. Djuanda No. 95,
Ciputat, Tangerang Selatan,
Banten, 15412 INDONESIA
http://www.uinjkt.ac.id/

メルキュブアナ大学 (Universitas Mercu Buana)
Kampus Meruya
Jl. Meruya Selatan,
Kebon Jeruk, Jakarta Barat
INDONESIA
http://www.mercubuana.ac.id/

ディポネゴロ大学 (Universitas Diponegoro)
Jl. Prof. Soedarto,
SH Tembalang, Semarang,
1269 INDONESIA
http://www.undip.ac.id/

バンドンイスラム大学 (Universitas Islam Bandung)
Jl. Tamansari No. 20,
Bandung, 40116 INDONESIA
https://www.unisba.ac.id/

私立ゴンザガ高等学校 (SMA Kolese Gonzaga)
Jl. Pejaten Barat 10A,
Jakarta Selatan, 12550 INDONESIA
http://www.kolesegonzaga.com/

インドネシア会計士協会 (IAI: Ikatan Akuntan Indonesia)
http://www.iaiglobal.or.id/